

伏輪まではあれども、裏には紺青地に書き、貝摺られたり、略註 供御のだにかくあれば、たゞ人の料いかであらんや、誠に箔してだみて畫くは、いたく下れる世にし出きたる成べし、さて其繪もおさくしき事はあるべからず、略下

〔空穂物語 梅の花筈〕うちよりいと、ものまいる、略たんの。お。し。き。ぢんの。だいに。すゑて、略下

〔空穂物語 祭の使〕その日に成て、まづにしのおとゞにあふみのかみ、せんかうの。を。し。きはたちづつ、れいのごとして二十人のまうちきんだちとりてまいる、

〔源氏物語 若菜三十五〕うへのきぬの色々けぢめをきて、おかしきかけばんとりつゝきて、ものまいりわたすをぞ、略まも人などはめにつきて、めでたしとはおもへる、尼君のおまへにも、せんかうのお

しきに、あをにびのおもておりて、さうじものを參るとて、めざましき女のすぐせかなと、をのがじ、はまりうごちけり、

〔空穂物語 菊の宴一〕女御の君のまかなひ、民部卿御前に、ぢんの。を。し。き。おなじ事してうちしきまいる、

〔紫式部日記〕南おもてに、おまへの物はまいりすへたり、にしによりて、おほみや東三の院のおものれいのぢんのおしき、なにくれの。だいな。りけんかし、

〔拾遺和歌集 七名〕くちばいろのおしき

あし曳の山のこのはのおちくちばいろのおしきぞあはれなりける

〔續千載和歌集 七名〕すきおしき
入道前太政大臣實藤原

忘れずよ霜の玄たなる花す、きおしき形みの秋の面影

〔諸家系圖纂二十〕梶川系圖

正治中略宿主賀出頭角切折敷菱餅ヲ
スへ進云正治悦喜シテ則爲家紋